



Title	マア語の地域方言と音韻交替について
Author(s)	安部, 麻矢
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2021, 2020, p. 1-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/85086
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

マア語の地域方言と音韻交替について¹⁾

安部 麻矢

要旨 タンザニア北東部で話されているマア語 (Mbugu) には大きく分けて内マア語と外マア語のふたつの変種がみとめられる。そのうちの内マア語は言語接触の結果成立したと考えられ、近隣のバントゥ系言語とは異なる構造を持つ。もう一方の外マア語はパレ語と非常に類似している。本稿では特に内マア語に焦点を当て、音韻的特徴について概観する。

内マア語は近隣のバントゥ系言語にはみられない声門閉鎖音と無声側面摩擦音を音素として持つ。また、先行研究において、マガンバ方言とブンブリ方言とラングウィ方言では、内マア語の非バントゥ系の語彙の一部において音韻交替現象があることが報告されているが、筆者の調査の結果から、上記の3つの地域以外のいくつかの地域の方言でも同様の現象がみられることを示した。

1 はじめに

本稿では、タンザニア北東部でマア (Mbugu) の人々によって話されているマア語 (Mbugu, Ma'a とも) の変種とその地域方言にみられる音韻交替について概説する。

マア語 (Mbugu) はタンザニア北東部のタンガ州の西ウサンバラ山地²⁾のいくつかの分散した地域で話されている。これまでの研究において、彼らの言語には2つの変種³⁾がみとめられている。そのうちのひとつである内マア語 (Inner Mbugu) は、19世紀末より周辺のバ

1) 本稿で参照するデータは、筆者と研究協力者が2016年7-8月、2017年7-9月、2018年8月にタンザニアのタンガ州 (Tanga Region) ルショト県 (Lushoto District) での現地調査で収集したものである。コンサルタントはルショト県マガンバ (Magamba) 在住の Asha Mbaruku さん (1949年生まれ・女性) と Ester Nesala Waziri さん (1965年生まれ・女性) のほか、ルショト県のマア語話者のみなさんである。本研究は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (2)」の成果の一部であり、日本学術振興会科学研究費助成金 (特別研究員奨励費)「アフリカ諸言語の言語接触に関する記述調査研究—タンザニア・マア語の2変種を中心に」(課題番号: 14J40066 研究代表者: 安部麻矢) と同「タンザニア・マア語の2変種の社会言語学的記述研究—言語接触の視点から—」(課題番号: 17J0108 研究代表者: 安部麻矢) の助成を受けている。

2) 東西のウサンバラ山地およびその麓一帯の圧倒的な多数派民族はシャンバー (Shambaa) である。彼らの民族語であるシャンバー語 (Shambaa, G23) がこの一帯での優勢言語として話されており、マア語の人々はみな、シャンバーの人々とはシャンバー語で話す。一方シャンバーの人々のほとんどはマア語を理解することも話すこともできない。詳しくは安部 (2016) 参照。

3) このふたつの変種をそれぞれ個別の言語ととらえるか、ひとつの言語のレジスターであるととらえるかが、これまでのマア語研究の主要なテーマのひとつとなっている。筆者は社会言語学的な状況から、それぞれ個別の言語としてみなすという立場を取っているが、本稿では「言語」ではなく、「変種」と呼ぶこととする。詳しくは安部 (2016) 参照。

ントゥ⁴系言語とは異なる構造を持つことが知られており、バントゥ諸語に見られる、名詞クラスと動詞類接頭辞との一致 (agreement) システムを持ちながら、非バントゥ系言語起源であると見られる語彙を多く有する⁵ことから、言語接触により成立したと考えられている。この変種は、20世紀後半から言語接触の研究領域でしばしば取り上げられ、論じられてきた⁶。もう一方の外マア語 (Normal Mbugu, 以下 NM) は、バントゥ諸語のひとつであるパレ語 (Pare G.22⁷) と非常に類似しているといわれてきた変種であるが、1970年代に入るまで詳しく言及されたことはなかった。これら2つの変種の構造を比較すると、形態統語法および名詞クラスの接頭辞や動詞類接頭辞などの形式はほぼ同一で、差異は主に語彙 (特に内容語) の面にみられることがわかる。Maho (2009: 97) はマア語をパレ語と類似点があるバントゥ諸語のひとつとみなし、内マア語を G20A、外マア語を G221 と分類している⁸。

Lewis et al. (2015) では ‘Mbugu’ の話者人口は 5000 人 (1997 年)⁹で、民族全体の人口が 32,000 人であるという推定値が報告されている。なお、推定値の推定方法は不明である。

本稿で参照するマアの人々の居住地は次頁図 1 の通りである¹⁰。また、次頁図 2 はタンザニア北東部の言語地図であり、特にマア語に関係があると思われる言語の分布を詳しく記している。

4) アフリカ大陸で話されているアフリカ固有の言語は、ナイル・サハラ (Nilo-Saharan) 語族、アフロアジア (Afro-Asiatic) 語族、ニジェール・コンゴ (Niger-Congo) 語族、コイサン (Khoisan) 語族の4つの語族に分類される。このうちバントゥ諸語は、ニジェール・コンゴ語族に属し、サハラ以南アフリカで広く話されている言語群である。アフリカの諸言語については、清水 (1988: 237-439) を参照。

5) 内マア語に見られる非バントゥ系の語彙については、アフロアジア語族のクシ語派南部クシ諸語に属し、タンザニアで話されているイラク語 (Iraqw) グループのほか、ナイル・サハラ語族の東スーダン語派東ナイル諸語に属し、ケニアとタンザニアの国境地域で話されているマサイ語 (Maasai) などとの類似が指摘されている (Meinhof 1906, Green 1963, Mous 2003 など)。

6) 詳しくは安部 (2016: 9-18) 参照。

7) バントゥ諸語の分類については、Guthrie (1967-71) の分類法が、その後のほかの研究者による新データの提示により多少の改善が加えられながらも、現在でも主流として用いられている。地域ごとに15のゾーンに分けられ、その中で二桁の数字によりさらに分類される。左から一桁目がゾーンの中で類似性により分けられた下位グループで、二桁目がその下位グループに属するそれぞれの言語に割り振られた数字である。パレ語は、Gゾーンの20 (シャンバラ) グループの2番目ということである。先述のシャンパー語が G23 と、同じ下位グループに属しているので、近縁の言語で類似点も多いが、相互理解は難しい。

8) Maho (2009) の分類も注7で述べた Guthrie (1967-71) の分類方法に沿っており、さらにより詳しい分類をするために3桁目の分類も導入している。内マア語と外マア語に付した分類番号は、マア語をバントゥ諸語とみなしたうえで、内マア語と外マア語をそれぞれパレ語に類似した変種として分類していることを示す。分類法については Maho (2003) を参照。

9) 5000人という話者人口について、どちらの変種の話者人口かの明記はないが、分類が「混合言語」とあるため、内マア語の話者の人口であると思われる。つまり、Lewis et al. (2015) が指す ‘Mbugu’ は本稿における内マア語のことであると推定され、本稿が指す Mbugu とは異なる。

10) マアの人々の居住地については詳しくは安部 (2016: 5-8) 参照。



図 1 マアの人々の居住地

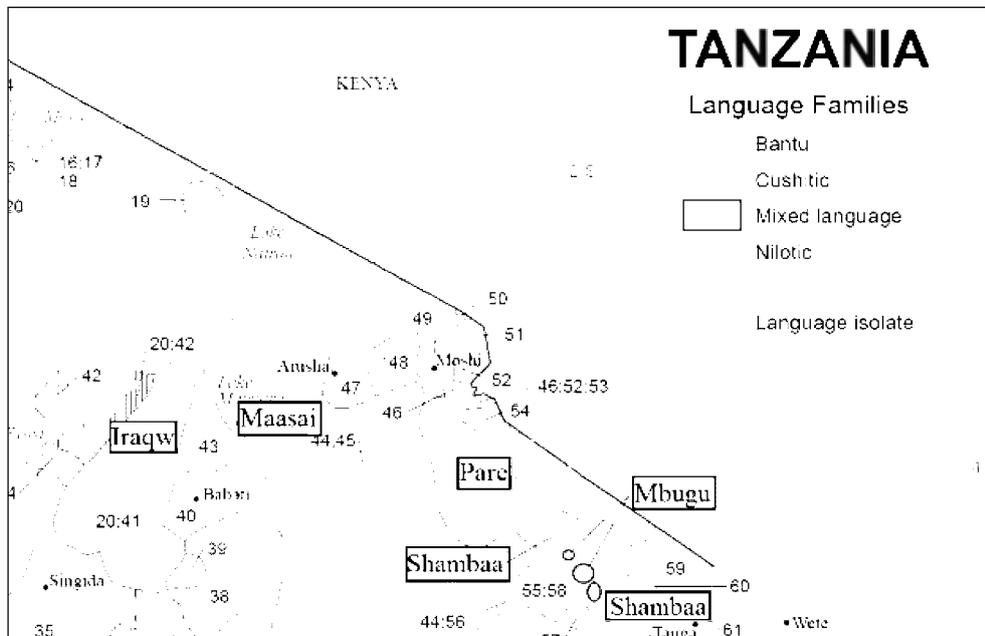


図 2 タンザニア北東部の言語地図

(1) a. maʔíba b. mʔá
 ma-ʔíba m-ʔá
 NPX.CL6-milk NPX.CL3-head
 「乳」 「頭 (単数)」

(2) a. mwála b. mʔihé
 mw-ála m-lihé
 NPX.CL3-fire NPX.CL3-moon, month
 「火 (単数)」 「月 (単数)」

一方、外マア語にのみみられる音素はない。

また、内マア語・外マア語ともに、成節鼻音 *m*、*ŋ* を持つ。音節構造は開音節 ((N)C(G))V と *m*、*ŋ* である。

2.2 トーン

内マア語、外マア語ともに、ピッチの高低の対立がある。本稿ではこのピッチの高低をトーンと呼ぶ。内マア語、外マア語ともに、トーンは高 (H) と低 (L) の対立がある¹⁵。TBU (Tone Bearing Unit) は母音と成節鼻音であり、*contour tone* はない。トーンの対立のパターンは形態素によって決まっているが、形態素の中には固有のトーンを持たず、*spreading* によって隣接する要素のトーンの影響を受けるものがある¹⁶。また、名詞クラス接頭辞は全て L で現れるが、9/10 クラスの名詞クラス接頭辞 *N*¹⁷ の場合、TBU となる母音を持たず、後続する名詞語幹の初頭音 (阻害音) と合わせて前鼻音化子音となるが、名詞語幹の初頭音節のトーンが保持される¹⁸。これらのことから、マア語のトーンは音声的には H と L の対立であるが、音韻的には H と \emptyset の対立であると考え¹⁹。トーンの体系は内マア語と外マア語で若干異なると思われ、音韻配列が同一の語が、内マア語と外マア語とで異なるトーンを持つ例が多数収集されている²⁰。本稿のマア語のデータの提示においては、トーンについては音声レベル (実現形) での表記をする。

¹⁵ 本論文では、高トーン (´) のみを標示する。

¹⁶ 例えば、動詞派生接尾辞は固有のトーンを持たず、動詞語根末のトーンが *spreading* する。

¹⁷ 名詞クラス接頭辞の鼻音は後続する名詞語幹の初頭音 (阻害音) の調音点と有声性と同化する。

¹⁸ 例えば、

a. mbúka	b. mbaʔú	c. ŋkupe
m-búka	m-baʔú	ŋkupe
NPx.CL9/10-vegetable	NPx.CL9/10-lion	NPx.CL9/10-mite
「野菜 (単/複)」	「ライオン (単/複)」	「ダニ (単/複)」

¹⁹ H が *privative tone* であるとする考え方である。このようなトーンの音韻的な対立は他のバントゥ諸語にもみられる (Hyman 2001, Marlo and Odden 2019)。

²⁰ 例えば「8」を表す数詞は、内マア語では *mnané* であるが、外マア語では *mnané* である。また、「種 (単数/複数)」を表す名詞は、内マア語では *mbéju* であるが、外マア語では *mbéjú* である。

3 地域変種の音韻的差異

マア語のうち、内マア語には地域方言による語彙の差異がみられる。全く異なる語形のものが用いられている例²¹⁾もあれば、音韻の交替現象がみられる例もある。Mous (2003: 99-102) は地域方言の間の音韻の交替現象について言及している。

3.1 マガンバ方言とブンブリ方言

Mous は内マア語のマガンバ方言とブンブリ方言において、一部の語彙に /k/ と /x/、/h/ と /x/ の交替現象があり、マガンバ方言の語彙で /k/ で現れるところがブンブリ方言で /x/ に置き換えられたり、マガンバ方言の語彙で /h/ で現れるところがブンブリ方言で /x/ に置き換えられたりすると述べ、21 例を挙げている。音韻交替が起こっている語彙はいずれも非バントゥ系とみられるもののようである。

これについては、筆者の調査でも同様の結果が得られている。(3) と(4) は、マガンバ方言とブンブリ方言にみられる、/k/ と /x/、/h/ と /x/ の交替現象を示す例である。(3) は/k/ と /x/ の交替現象を示しており、「卵 (複数)」を表す内マア語の語は、マガンバ方言では makokohá である一方、ブンブリ方言では, maxoxohá である。

(3) マガンバ方言	ブンブリ方言
makokohá	maxoxohá
ma-kokohá	ma-xoxohá
NPX.CL6-egg	NPX.CL6-egg
「卵 (複数)」	「卵 (複数)」

また、(4) は /h/ と /x/ の交替現象を示しており、「木 (単数)」を表す内マア語の語は、マガンバ方言では m̩hatú である一方、ブンブリ方言では, m̩xatú である。

(4) マガンバ方言	ブンブリ方言
m̩hatú	m̩xatú
m̩-hatú	m̩-xatú
NPX.CL3-tree	NPX.CL3-tree
「木 (単数)」	「木 (単数)」

3.1 マガンバ方言とラングウィ方言

Mous はまた、マガンバ方言とラングウィ (Rangwi) 方言の一部の語彙では、/k/ と /h/ の

²¹⁾ 例えば、「子 (単数/複数)」を表す名詞は、マガンバ方言では m̩ʔijí/vaʔijí であるが、ブンブリ方言ではʔijí/vamilo、ラングウィ方言では paxé/vamilo と、本来のマア語の語形成では説明がつかない (名詞は「名詞クラス接頭辞-名詞語幹」で形成される) 形式が収集されている。

ほか、/x/ と /h/ および /h/ と /x/ の交替現象があるとし、マガンバ方言で /k/ で現れるところがラングウィ方言では /h/ に置き換えられている例 (ikádo と ihádo、いずれも「10」) とマガンバ方言で /x/ で現れるところがラングウィ方言では /h/ に置き換えられている例 (ximéno と himéno、いずれも「鳥 (単数/複数)」) を挙げている。また反対に、マガンバ方言で /h/ で現れるところがラングウィ方言では /x/ に置き換えられる例 (mhá と mxá、いずれも「薬 (単数)」) を挙げている。

これらについて、筆者と研究協力者のこれまでの調査の限りでは、/h/ と /x/ の交替現象のほか、/k/ と /x/ の交替現象のデータを得ている。(5) の例が示すように、「血」を表すマア語の語は、マガンバ方言では sakó である一方、ラングウィ方言では saxó である。

(5) マガンバ方言	ラングウィ方言
sakó	saxó
Ø-sakó	Ø-saxó
NPX.CL9-blood	NPX.CL9-blood
「血」	「血」

Mous (2003) が報告している、/k/ と /h/、/x/ と /h/ の交替現象は、筆者と研究協力者の現地調査の限りではデータが収集されなかった。

3.1 その他の方言

筆者と研究協力者が 2017 年と 2018 年に行った現地調査では、マアの人々がまとまった数 (100 人以上) 居住すると報告されている地域を訪問し、それぞれの地域で複数名の話者を対象に基本的な語彙調査を行った。それによると、フイザイ (Fuizai)、クウェカンガ (Kwenkanga)、マリブウィ (Malibwi) という村 (図 1 参照) の話者から収集した語彙においても、音韻の交替現象がみられることがわかった。各方言の音韻交替の例をまとめると、次頁表 1 のとおりである。

	Magamba	Rangwi	Fuizai	Kwekanga1	Kwekanga2	Malibwi	Bumbli
血	sakó	háha ²²	háha	saxó	sahó	saxó	háha
木 (単数)	ṃhatú	ṃxatú	ṃxatú	ṃxatú	ṃhatú	ṃhatú	ṃhatú
卵 (単数)	ikokohá	ixoxóhá	ihóhóá	ixoxóhá	ihohóhá	ixoxóhá	ixoxoá
10	ikádo	ixádo	ixádo		ixádo	ixádo	
割る	-xáʔa	-xáʔa	-xáʔa	-xáʔa	-háʔa	-xáʔa	-xáʔa

表 1 各方言の音韻交替例一覧

3.2 考察

表 1 が示すように、地域方言間の音韻交替は、それぞれの方言の中で統一して起こっているわけではないことがわかる。マガンバ方言を軸として他の方言の例をみると、例えばマガンバ方言と他方言における /k/ と /x/ と /h/ の交替については、マガンバ方言で /k/ で現れるところが Kwekanga 2 の方言では /h/ で現れると推測されるので、「10」を表す語は Kwekanga 2 の方言では ihádo となるはずのところ、ixádo である。また、マリブウィ方言では、マガンバ方言の /k/ は /x/ で現れると推測されるが、「木 (単数)」を表す語は ṃxatú ではなく ṃhatú である。それぞれの地域で多数の話者を対象にした聞き取りは行っていないため、これがそれぞれの地域で共通してみられるのか、個人の差によるものなのかは明らかではない。

これらの音韻交替について、Mous (2003: 101) はこれまでの文献に現れる内マア語の語彙を参照し、これらは通時的な音韻変化の結果であるかもしれず、/k/ > /x/ > /h/ という変化をたどっているのではないかと説明している。しかしながら、これまでの文献にみられる内マア語の語彙がそれぞれ同じ地域で採集されたものであるかは確認されておらず、本当に通時的な音韻変化が起こっているかどうかは明らかではない。また通時的な音韻変化であるならば、マア語の話者のコミュニティ全体で同じように変化してもよいと思われるが、現在のマア語の状況の限りでは地域によって差がみられ、また、語によっても変化に差がある。例えば、「木」を表す語には ṃkatú という音韻交替の例はみられず、ṃxatú か ṃhatú であり、同様に、「割る」を表す動詞語根はほとんどの地域で -xáʔa であり、-káʔa という例はみられず、-háʔa という例もひとつの地域で収集されたのみである。Mous (2003) は筆者の調査で得たデータよりもより多くの例を収集し、分析しているので、筆者も今後さらなる調査により、より多くの例を収集し、検証する必要がある。

²²⁾ Mous (2003) は、sakó~saxó~sahó と háha について、もともとは前者は牛の血、後者はそれ以外の血という区別があったものが、次第にどちらも広く血一般のことを指すようになり、どちらを使うかで地域差が生まれたと説明している。

4 まとめ

本稿では、マア語の音韻体系を概観したのち、先行研究において報告されている、内マア語の非バントゥ系の語彙の一部にみられる、地域方言間の /k/ と /x/, /h/ と /x/ の交替現象について、筆者の調査によるデータから検証し、ブンブリ方言以外の地域方言でも同様の現象がみられることを示した。一方、この音韻交替はひとつの地域方言の中で統一して起こっているものではないこともみた。今後の調査においては、それぞれの地域でより多くの語彙を収集することと、より多くの話者を対象にした聞き取り調査と語彙調査によりをさらなるデータを収集することを今後の課題をしたい。

引用文献

- 安部麻矢 (2016) 『マア語 (Ma'a/Mbugu) の記述研究—文法と社会言語学的考察—』 京都大学博士論文。
- 清水紀佳 (1988) 「アフリカの諸言語」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典』 第1巻, 237-439. 東京: 三省堂。
- 中野暁雄 (1988) 「クシ語派」 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 『言語学大辞典』 第1巻, 1444-51. 東京: 三省堂。
- Green, E. C. (1963) "The Wambugu of Usambara." *Tanganyika Notes and Records* 61, 175-188. Dar es Salaam: Tanganyika Society.
- Guthrie, Malcolm. (1967-71) *The Classification of the Bantu Languages*. London: Oxford University Press.
- Hyman, Larry M. (2001) "Privative tone in Bantu." In Kaji, Shigeki, ed. *Cross-Linguistic Studies of Tonal Phenomena*, 237-57. Tokyo: ILCAA.
- Kiessling, Roland and Maarten Mous. (2003) *The Historical Reconstruction of West Rift Southern Cushitic*. Köln: Rüdiger Köppe.
- Lewis, M. Paul, Gary F. Simons and Charles D. Fennig (eds.) (2015) *Ethnologue: Languages of the World*. Eighteenth edition. Dallas: SIL international. <https://www.ethnologue.com> (Retrieved on October 15, 2015).
- Maho, Jouni Filip. (2003) "A classification of the Bantu languages: an update of Guthrie's referential system." In Derek Nurse, and Gérard Philippson, eds. *The Bantu Languages*. First Edition, 639-51. London and New York: Routledge.
- Maho, Jouni Filip. (2009) "NUGL online: the online version of the new updated Guthrie list, a referential classification of the Bantu languages." https://brill.com/fileasset/downloads_products/35125_Bantu-New-updated-Guthrie-List.pdf. (Retrieved on March 24, 2021).

- Marlo, Michael R and David Odden. (2019) "Tone." In Van de Velde, Mark, Koen Bostoen, Derek Nurse, and Gérard Philippson, eds. *The Bantu Languages*. Second Edition, 150-71. London and New York: Routledge.
- Meinhof, Carl. (1906) "Linguistische Studien in Ostafrika, X: Mbugu." *Mitteilungen des Seminars für orientalische Sprachen* 9: 294-323.
- Mous, Maarten. (1993) *A Grammar of Iraqw*. Hamburg: Helmut Buske.
- Mous, Maarten. (2003) *The Making of A Mixed Language: The Case of Ma'a/Mbugu*. Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins.